

シンガポール国立博物館における戦争の展示と「昭南博物館」の記憶

金 子 淳

キーワード：博物館、展示表象、シンガポール、昭南島、戦争、植民地

はじめに

シンガポールは、日本の淡路島ほどしかない狭い国土でありながら、1970年代以降急激な経済成長を遂げ、現在では東アジアを代表する経済国家としての地位を確立している。しかしその道のりは平坦ではなく、他国からの侵攻、植民地化が繰り返されていた。16世紀にポルトガルの支配下に入ったのち、17世紀にオランダ、18世紀にはイギリスの植民地となり、イギリス統治時代が100年以上続く。1942年からは日本軍の侵攻により日本の統治下に入るが、日本の敗戦後は、再びイギリスの植民地になったのち、マレーシア連邦への併合を経て、1965年にマレーシア連邦から追放される形で分離独立に至っている。

このうち、およそ3年半にわたる日本統治時代には、シンガポール島が「昭南島」に改称され、日本陸軍の軍政下におかれたが、その「昭南島」において、イギリス植民地時代にイギリスによって建設されたラッフルズ博物館が、「昭南博物館」として日本人の手によって継続して運営されていたことはあまり知られていない。しかも、軍政下という特殊な状況であったにもかかわらず、「敵と味方の入りまじった奇妙な学者グループ」[コーナー 1982: 2] が出現し、日本人の研究者がイギリス人とともに博物館資料の維持のために心血を注ぎ、結果的に多くの文化財が戦火を免れることになるのである。

「昭南博物館」は現在、「シンガポール国立博物館」と名を変え、多くの観光客が訪れる重要な観光拠点となっているが、その展示において、「昭南島」時代の歴史や、自館の歴史を振り返る形で「昭南博物館」についても扱っている。そこで本稿では、シンガポール国立博物館において日本統治期がどのように表象され、さらに「昭南博物館」がどのように描かれているのかを検証することを通して、博物館で戦争を展示することの意味とその課題について考察するものである。

1 「昭南博物館」の成立

「昭南博物館」は、イギリスが植民地時代に建設し、日本が統治後に引き継いだという意味において、「植民地博物館」の一種である。そこでまず、日本における植民地博物館について概観した後、「昭南博物館」がどのように成立したのか、その過程を明らかにしておきたい。

(1) 植民地博物館と「昭南博物館」

日本における「植民地博物館」とは、日本政府の支配下にある海外領土に存在していた博物館のことを指し、朝鮮、台湾、樺太、満州などのいわゆる植民地だけではなく、日本軍政下におかれたシンガポール、インドネシア、マレーシアなどの占領地も含めて捉えられる。そのため、植民地博物館のありようは多様であり、設立の経緯などによってその性質や役割が大きく異なるが、おおむね次の二つに分類できる [金子 2007 : 305]。

一つは、植民地化した後に、日本人の主導によって博物館を新たに設立したケースである。たとえば、1910年の日韓併合条約により日本領となった朝鮮において1915年に設立された「朝鮮総督府博物館」(写真1)や、1905年に植民地となった樺太で1917年に設立された「樺太庁博物館」(現サハリン州郷土博物館、写真2)などがこれに該当する。そのほか、台湾の「台湾総督府博物館」(現台湾国立博物館)や満州国の「満州国国立中央博物館」⁽¹⁾、関東州の「関東都督府博物館」(現旅順博物館)など、日本の植民地には新規施設として博物館が建設されている。



写真1 朝鮮総督府博物館



写真2 樺太庁博物館

もう一つは、すでに他国によって植民地化されていた地域を日本軍が軍事的に占領した際に、前宗主国により設立されていた博物館を接収し、継続して運営するケースである。イギリス領では、後に詳述するシンガポールの「ラッフルズ博物館」(現シンガポール国立博物館、写真3)、オランダ領ではインドネシアの「バタビヤ博物館」(現ジャカルタ市立歴史博物館、写真4)、「ボイテンゾルグ植物園」(現ボゴール植物園)などが挙げられる。これらの施設の管理・運営を日本人が担うこととなり、多くの科学者が日本から派遣されて着任することになるのである。



写真 3 ラッフルズ博物館 [日本博物館協会 1942]



写真 4 バタビヤ博物館 [日本博物館協会 1943]

したがって、本稿において対象とする「昭南博物館」は後者に位置づけられ、イギリスの設立した施設をどのように引き継ぐかが焦点化されることになっていた。

(2) ラッフルズ博物館から「昭南博物館」へ

シンガポールがイギリスの植民地となったのは、東インド会社で書記官を務めていたトーマス・スタンフォード・ラッフルズが1819年に上陸したことに端を発する。植物や歴史に多大な興味を寄せていたラッフルズは、地域の歴史と文学について教育する機関を設立する構想を持っていたものの、実現することなく帰国して、そのままロンドンで死去している。

その遺志を継いで、1849年に図書館の一部を間借りする形で開館したのがラッフルズ博物館だった。その後数回移転した後、1887年に現在地に恒久的な施設として建設された。この博物館では、マレー半島を中心に動植物、鉱物、考古学、民俗学などの研究を進め、膨大な関連資料を集積していた。なお、熱帯産の有用植物の栽培と研究を目的に1859年に設立されたラッフルズ植物園も、ラッフルズ博物館とともに一つの組織を形成していた。

ところが、1941年12月8日の日米開戦以降、日本はいわゆる「緒戦の勝利」をおさめ、フィリピンやビルマ（現ミャンマー）などを次々と軍事的に制圧していく。シンガポールには翌1942年2月に侵攻し、日本軍による軍政が敷かれて2月15日に「昭南島」と改名された。これにより、ラッフルズ博物館も「昭南博物館」と改称され、運営もイギリス人から日本人の手に渡ることになったのである。

この日本軍の占領で、ラッフルズ博物館時代に蓄積されてきた膨大な資料や標本などの文化財が破壊されるのではないかと危惧した日本人がいた。東北帝国大学で火山学・地質学などを講じていた田中館秀三である。サイゴン（現在のベトナム・ホーチミン）に滞在していた彼がシンガポールの地に降り立ったのは、シンガポールが陥落して2日後の1942年2月17日のことだった。到着するとすぐに昭南特別市の市庁舎に赴き、当時代理市長的な立場にあった昭南特別市総務部長である豊田薫に直談判する。任官辞令書も紹介状も持たずに、単身で乗り込んだにもかかわらず、田中館は占領直後の博物館・植物園の保護を任されることになるのである。

この場には、ケンブリッジ大学で生物学を学んだ後、シンガポールに移り住んで、ラッフルズ博物館・植物園で熱帯植物の研究を続けてきたイギリス人研究者、E. J. H. コーナーがいた。のちに田中館とともに昭南博物館の復興に奔走することになる彼は、このときの田中館の登場について次のように回想している [コーナー 1982 : 21-22]。

彼は中級程度の英語で自己紹介をした。田中館愛橘男爵の子息であること、日本においては科学者及び貴族院の長老格であること、英国ケンブリッジ大学キャベンディッシュ研究所でラザホードと共同研究をしたこと、ロンドン、オックスフォード、エディンバラの学会では名の知られていること、招聘されてイタリアの大学で三年間教えた経験のあること、バンクーバーとバタビアの太平洋学術会議には日本代表として出席したこと、南アフリカ、中国、満州、ヨーロッパと、世界じゅうを広く旅したこと、英語はいうに及ばず、フランス語、オランダ語、ドイツ語、イタリア語に堪能であること等々たてつづけに語った。

これらの経歴の半分は作り話だったことが後に明らかになるが、一種の「はったり」とはいえこのように自己紹介することで一瞬にして富田の信頼を獲得し、口頭辞令ながらも博物館・植物園の長という役職を得るのである（1週間後に正式な辞令が下りる）。

ところが、田中館は館長とはいっても無報酬だったばかりでなく、コーナーらイギリス人の研究者や現地人を雇用するために金策に苦慮していたという。こうして田中館のもとで、捕虜の身となったイギリス人研究者と日本人たちとの間で、日本軍や現地人の略奪と破壊から博物館の資料を守るための共同作業が始まったのである。

ここにもう一人、博物館の維持に尽力した人物が現れる。当時「マレーの虎」という異名で恐れられていた現地指令官山下奉文の軍政顧問としてシンガポールにやってきた徳川義親である。尾張徳川家第19代当主でありながら、植物学に造詣の深い学究肌の人物で、田中館らの活動に深い理解を寄せる。徳川はチャンギ刑務所に捕虜として収容されていたイギリス人研究者たちを引き取って、博物館と植物園に配属させ、各自の研究を続けさせた。田中館を全面的にバックアップするとともに、その後、自ら総長に就任する。

こうして、日本軍政下にありながら、日本人とイギリス人が共同して研究し、文化財の散逸を免れるという数奇な運命をたどった博物館は、1965年のシンガポール独立後、シンガポール国立博物館（National Museum of Singapore）と名付けられた。1993年から2006年までの間、シンガポール歴史博物館（Singapore History Museum）という名前になっていたが、新棟増築工事および旧棟改修工事を経て、2006年のリニューアルオープンとともに以前の名前に戻っている。

2 シンガポール国立博物館における戦争の展示

(1) シンガポール国立博物館の概要

現在のシンガポール国立博物館の建物は、1887年に建設されたビクトリア様式の旧館をメインとしている（写真5）⁽²⁾。建物中央には円形ドームがあり、ビクトリア女王在位50周年を記念して内部は50枚のステンドグラスで飾られている（写真6）。随所に改修工事が施されているが、基本的に建設当時の手法が忠実に再現されているため、歴史的建造物としての価値も高い。一方、2006年に完成した新館は、旧館とは対照的に、現代的なデザインになっているため、そのコントラストが際立っている（National Museum of Singapore 2007）。



写真5 シンガポール国立博物館外観

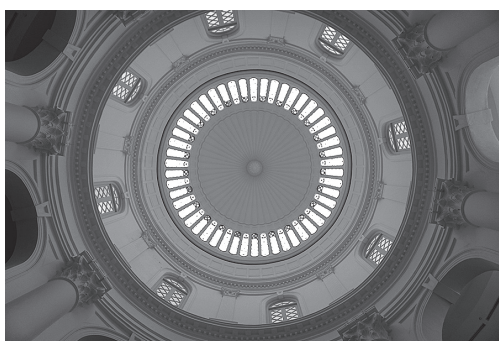


写真6 円形ドーム内部のステンドグラス

展示は、14世紀から現在までのシンガポールの歴史を展示する「ヒストリーギャラリー」と、シンガポールのライフスタイルや文化を紹介する「リビングギャラリー」からなっている。ヒストリーギャラリーがこの博物館のメイン展示であり、以下の4つのエリアからなっている。

- ①シンガプーラ（Singapura : -1818）
- ②直轄植民地（Crown Colony : 1819-1941）
- ③昭南島（Shonan-to : 1942-1945）
- ④シンガポール（Singapore : 1945-）

ヒストリーギャラリーの導入部となる①は、イギリスの植民地となる前の時代の展示であり、「シンガプーラ」とはサンスクリット語で「ライオンのまち」を指す。Orang Lautと呼ばれる人々（マレー語で「海人」）が住み、船を操り漁をしていたようすが展示されている（写真7）。

続いて②では、ラッフルズが上陸してから歴史が大きく動き出した過程を描き出している。1819年に上陸したラッフルズは、現地の支配者と交渉し、シンガポールを自由貿易



写真7 イギリス植民地以前の展示



写真8 イギリス植民地時代の展示

港とすべくイギリスの植民地とするが、その植民地時代の生活や文化を中心に展示が構成されている（写真8）。

そして「昭南島」の時代となる③へ続く。1942年から日本統治が始まって「昭南島」に名前を変え、食料や燃料の欠乏、病気、日本人による暴力や嫌がらせの中で生活せざるを得ない様子が展示されているが、詳しくは後述する。

ヒストリーギャラリーの最後を締めくくる④は、戦後の激動の時代である。第2次世界大戦後に再びイギリスの植民地となるが、その後、植民地独立の気運が高まる中で、シンガポールは1959年に完全自治になり、選挙に勝利したリー・クアンユー（Lee Kuan Yew）が最初の首相になる。マレーシアとの合併の紆余曲折を経て、1965年に完全に独立を果たした経緯が展示されている。

（2）日本統治時代の展示

イギリス植民地時代を扱う②の展示では、比較的明るいトーンで、近代的で都市的な生活が描かれている。古き良き時代としてとても好意的に描かれているのが印象的である。ところが、③の日本統治時代になると一転して暗黒の時代に入る。被占領国の立場から展示が組み立てられているので当然だが、徹底して重苦しい演出が展示室を覆う。それまでの雰囲気から一転して赤と黒を基調とした色使いで統一されているが、黒は闇、赤は戦火と血を表現しているのだろう。

この時代を象徴するかのように、冒頭のパネルには次のような一文がある。

戦争が他の地域で続くなか、シンガポールの人々は、食料や燃料の不足、病気、そして最悪の場合、日本人からの暴力と嫌がらせに苦しめられた。

日本の統治時代の期間は、イギリスに比べるとほんの僅かである。にもかかわらず、長いイギリス統治時代にも匹敵するような多くのスペースが割かれていた。それだけシンガポールにとって大きな影響をもたらした時代だったということが分かる。

展示では、日本軍の侵攻のようすを映像で確認した後（写真9）、日本軍がもたらした戦車や武器の展示が続く（写真10）。後ろに見える自転車の大群は、「銀輪部隊」と呼ばれる日本軍特有の部隊を示している。日本軍は、鬱蒼と生い茂るマレー半島のジャングルの厳しい行程を自転車で南下し、イギリス軍の背後を突いた。海路から来ると想定していたイギリス軍の装備は役に立たず、わずかな日数で降伏に追い込まれたのである。

シンガポールが降伏したとき、当時の日本の新聞は「祝シンガポール陥落」と大見出しで賛美する一方で、「The FALL of SINGAPORE」という映画を現地で上映している（写真11）。

連合国軍の兵士は、戦争捕虜（POW: prisoner of war）として抑留された。捕虜が収容されていた刑務所の実際の扉が象徴的に展示してあり（写真12）、大きく引き伸ばされた刑務所の写真パネルが大きな迫力を持つ（写真13）。何よりも“We were forever hungry”という見出しがその惨状を物語っている。

日本統治時代は、1945年の日本の無条件降伏とともに終わりを迎えるが、日本軍からの解放を喜ぶ大勢の子どもたちの笑顔の写真とともに展示されているところに、シンガポールにとっての日本統治の意味が表現されているといえるだろう（写真14）。



写真9 日本軍の侵攻を映像で説明



写真10 日本軍の戦車と銀輪部隊



写真11 映画「シンガポール陥落」ポスター



写真12 イギリス人捕虜の刑務所の扉



写真 13 イギリス人捕虜収容所の写真



写真 14 日本統治終了後の子どもたち

(3) シンガポール国立博物館と昭南博物館

一方、リビングギャラリーは、シンガポールの生活や文化に焦点を当てたテーマ展示となっている。構成は以下のとおりである。

- ①近代の植民地 (Modern Colony)
- ②昭南時代を生き延びる (Surviving Syonan)
- ③成長 (Growing Up)
- ④シンガポールの声 (Voices of Singapore)

ここでも、モダンなイギリス植民地時代と戦後の経済成長の間に、暗黒の昭南島時代がはさまれているという構造をもっているが、特に②に注目して展示内容を確認したい。ヒストリーギャラリーよりもさらに広いスペースで、日本統治下における日常生活に関連する展示物が多く並べられている。

その中でもまず目を引くのが、現地人に対して日本語の使用を強制した、皇民化教育に関する資料である。日本語を公用語とするための日本語教育が行われ (写真 15)、その教育の現場で実際に使われた教科書や辞典類が展示されている (写真 16)。「アシタ」「オワリ」「センタク」の音に合致する文字をはめると正解の音声流れるという、日本語教育に関する触察型の展示 (ハンズオン展示) もある (写真 17)。

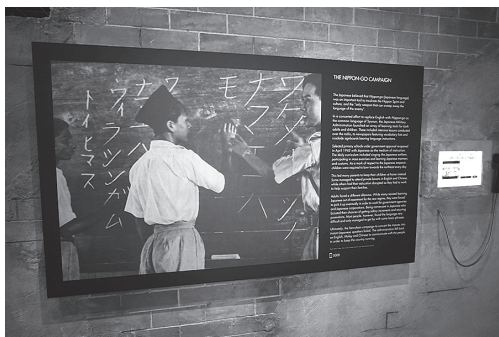


写真 15 日本語教育のパネル



写真 16 日本語教科書

そしてその次に来るのが「昭南博物館」の展示である。「昭南における博物館事情 (Museum Matters in Syonan)」という見出しのもとで、昭南島時代の自館を振り返る展示を行っている。パネルには、先に述べたコーナーと田中館秀三、徳川義親との交流のエピソードとともに、日本統治時代においても博物館資料は損傷や散逸がほとんどなく、昭南博物館が「マレー半島におけるもっとも安全な場所」であったことが紹介されている(写真 18)。

また、展示ケース(写真 19)には、コーナーが所有していた「昭南特別市物資購買券」のほか(写真 20)、昭南博物館の日本人職員の写真も展示されている(写真 21)。この写真には、ラッフルズ博物館の外観のほか、前列左端に徳川義親の姿も見える。

昭南博物館に関する展示の次は、日本統治期の経済や商業活動に関する展示が続く。食糧が配給制になり「食糧配給所」で受給した(写真 22)。米、塩、砂糖などは、家族の多寡によって量を決められた(写真 23)。いずれも食料が不足し、困窮している様子が描かれており、とりわけ7歳のときにロープ工場で働いていた人物の証言はひととき大きく展示されている(写真 24)。



写真 17 ハンズオン展示

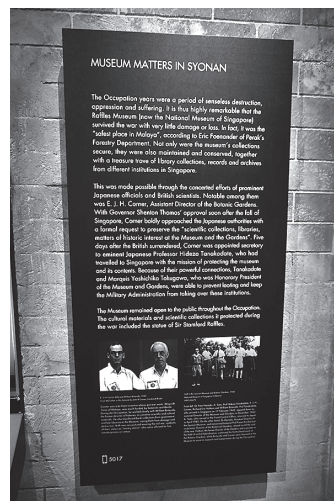


写真 18 昭南における博物館事情パネル

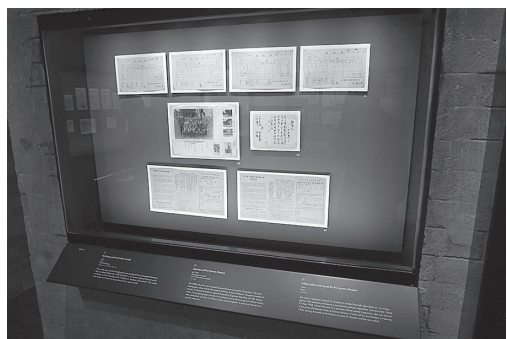


写真 19 昭南博物館の展示ケース

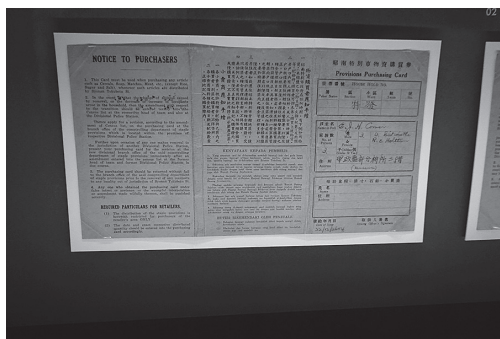


写真 20 コーナー所有の「昭南特別市物資購買券」



写真 21 昭南博物館のスタッフ



写真 22 食糧配給所

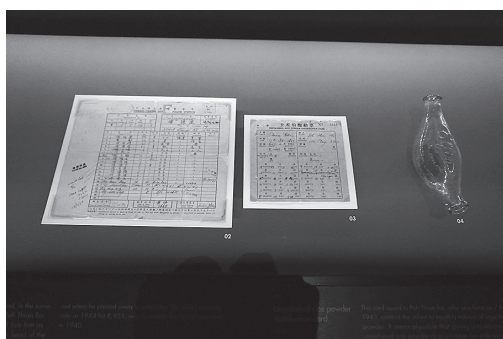


写真 23 配給の戸口調査票

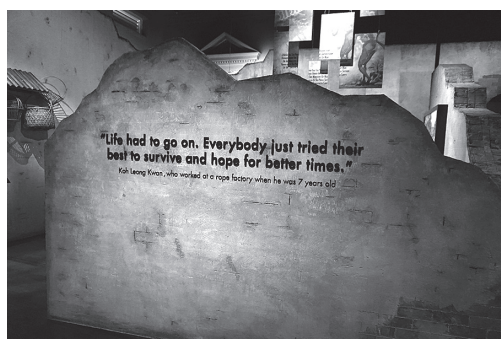


写真 24 証言

3 シンガポールにとっての「昭南博物館」／日本にとっての「昭南博物館」

(1) シンガポールにとっての日本統治時代

ヒストリーギャラリーにおける日本統治期以降の歴史で一つのハイライトとなっているのが、マレーシア連邦からの分離独立の展示である。マレーシア連邦から半ば追放される形で独立せざるを得なくなった経緯が、「シンガポール建国の父」といわれるリー・クアンユーの演説を中心に構成されている（写真 25）。特に、涙を流しながら独立を国民に伝える映像は胸を打つ（写真 26）。そして、この分離独立を契機に、初代首相リー・クアンユーの指導力のもとでシンガポールは驚異的な経済成長を遂げ、現在の繁栄につながっていくわけである。展示では、豊かになった庶民の生活が再現され（写真 27）、未来への展望を明るく描いて締めくくられる（写真 28）。

このようにみえてくると、戦後の繁栄と、わずか3年半の日本統治期との間の落差があらためて浮かび上がる。そしてその落差こそが、シンガポールにとっての日本統治時代の歴史的意味だったのだ。リー・クアンユーは、その回顧録において、「昭南島」時代の日本人の残虐性について次のように述べている [リー 2000 : 35]。



写真 25 演説台



写真 26 国民に独立を伝える映像



写真 27 豊かな生活の展示

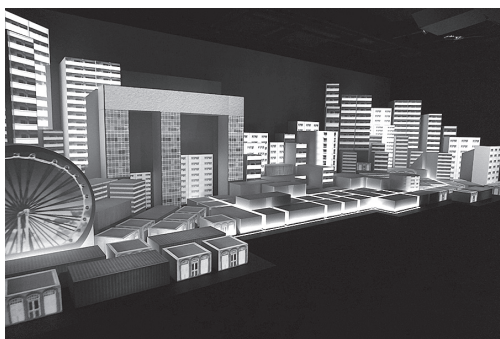


写真 28 未来の象徴展示

日本人は我々に対しても征服者として君臨し、英国よりも残忍で常軌を逸し、悪意に満ちていることを示した。日本占領の三年半、私は日本兵が人々を苦しめたり殴ったりするたびに、シンガポールが英国の保護下にあればよかったと思ったものである。

同じアジア人として我々は日本人に幻滅した。日本人は、日本人より文明が低く民族的に劣ると見なしているアジア人と一緒に思われることを嫌っていたのである。日本人は天照大神の子孫で、選ばれた民族であり遅れた中国人やインド人、マレー人と自分たちは違うと考えていたのである。

この日本人の「常軌を逸し」た行動とは、悪名高い「シンガポール大検証」（華僑虐殺事件）のことを指している。1942年2月から3月にかけて、日本軍が中国系住民（華僑）を大量虐殺した事件である。戦後の裁判では、日本側は被害者数5,000～6,000人ほどと証言したのに対し、虐殺を追及する側は4万～5万人という数字を挙げたが、真相は明らかになっていない。リー・クアンユー自身も強制命令で集合場所に集まっているが、機転を利かせた行動で難を逃れている〔岩崎 1996：39〕。ともあれ「昭南島」の時代はシンガポールの人々にとって「暗黒」としか言いようのない時代だった。

さらに、同じ著書で次のようにも書いている〔リー 2000：53〕。

日本占領の三年半は私の人生にとり最も大切な時期だった。私は、人間とその社会、行動の動機、衝動などについて生々しくその実態をかいま見ることができた。政府というものの評価や、革命的变化をもたらす道具としての権力に対する理解などは、この日本占領期の経験がなければおそらく得られなかったと思う。

つまり、この日本統治時代の凄惨な経験をバネに、戦後の発展の礎を築いたのである。「暗黒の時代」を文字通り「反面教師」にして新しい時代への復興に賭けた。シンガポール国立博物館における日本統治時代の展示も、このような国民感情をストレートに反映し、シンガポール国民が思い描く歴史像が展開されていたのである。

(2)「昭南博物館」とその後

そのような中であって、昭南博物館の展示は、いささか異色とも言えるような位置づけだった。「暗黒の時代」にあって、科学や学問への奉仕という一点で結びついたイギリス人と日本人との共同作業によって貴重な文化財が守り抜かれたという、一種のユートピアとして描かれていたからである。

それは、田中館秀三と徳川義親というある意味で奇特な人物の尽力抜きにはなし得なかったことだが、逆に言えば、こうしたユートピア的状况がなければ、「昭南博物館」に関する記憶自体、社会の中から消え去っていたに違いない。

そして同時に、この「昭南博物館」の遺産が、戦後日本の博物館にも大きな影響をもたらしたことも、また知っておかなければならないだろう。写真 21 の前列右端に座っていた人物は、副館長の羽根田弥太である。羽根田は発光生物を専門とする生物学者で、昭南博物館の副館長を務めた後、1955 年からは横須賀市博物館（現横須賀市自然・人文博物館）の初代館長に就任し、1974 年まで務めている。

瀧端真理子によれば、学術研究志向の強かった昭南博物館において英国型博物館の実務経験を積んだ羽根田は、のちの横須賀市博物館の運営方針にも大きな影響をもたらしたという [瀧端 2004:3-4]。内部に対立を孕みながらも、羽根田の強いリーダーシップによって、横須賀市博物館は学術研究に存在感を放つユニークな博物館へと育っていく。昭南博物館で羽根田の部下だったコーナーも、「昭南博物館時代の経験を見事にいかして、横須賀に博物館を建てた。博物館の目的は物を展示するだけでなく、研究をし、教育をすることであるという彼の信条が随所にいかされた立派な博物館である」と評している [コーナー 1982:10]。そしてこの横須賀市博物館の実践は、伊藤寿朗によって 1960 年代中小博物館における活動の定着例として見出され [伊藤 1991]、のちの地域博物館論の着想へとつながっていくのである⁽³⁾。

「昭南博物館」は、確かに日本が軍事的に侵略し「暗黒の時代」を作り上げた中で生まれた存在である。しかし、そこからは現在において読み解くべきさまざまな事柄や視点が含まれている。「昭南博物館」を、現在の博物館とは無関係のものとして思考の枠組みか

ら外すのではなく、その存在と実践を現在とのつながりの中で考えていく視点こそが求められている。

注

- (1) ただし、満州国は国際的には非公式の傀儡国家であるため、「植民地帝国日本」の「公式の帝国」の一部として認められた朝鮮や台湾などとの違いに焦点を当てた研究もあり [大出 2012]、一括りにすることには慎重になる必要がある。
- (2) 以降、本稿に掲載されている写真は、筆者が2016年3月に実施した現地調査において撮影したものである。また、展示内容についても同様である。
- (3) ただし、瀧端 [2004: 9-10] は、林公義（横須賀市自然・人文博物館元館長）への聞き取り調査において、「伊藤は羽根田的アカデミズムよりも、柴田の活動の方を評価として高く見ていた」という証言を得ている。「柴田」とは、学芸員として羽根田とともに横須賀市博物館を支えた柴田敏隆のことを指す。林によれば、「羽根田の研究的な活動と、柴田の社会教育的活動は役割分担がなされており、博物館はそのどちらか両極端であってはならず、2つの性格がミックスされたものが横須賀市博物館には生きている」という [瀧端 2004: 11]。

参考文献

- 伊藤寿朗（1991）『ひらけ、博物館』岩波書店
- 岩崎育夫（1996）『リー・クアンユー——西洋とアジアのはざままで』（現代アジアの肖像 15）岩波書店
- 大出尚子（2012）「日本の旧植民地における歴史・考古学系博物館の持つ政治性——朝鮮総督府博物館及び「満州国」国立（中央）博物館を事例として」『東洋文化研究』14号
- 金子 淳（2007）「15年戦争期の博物館における〈日本〉の表象——「植民地博物館」との関係から」『戦争と表象／美術 20世紀以後』美学出版
- E. J. H. コーナー（1982）『思い出の昭南博物館——占領下シンガポールと徳川侯』中央公論新社
- 瀧端真理子（2004）「横須賀市自然・人文博物館の研究と教育（1）羽根田弥太と柴田敏隆の時代」『博物館学雑誌』29巻2号
- 日本博物館協会（1942）『博物館研究』15巻3号
- 日本博物館協会（1943）『博物館研究』16巻11号
- リー・クアンユー（2000）『リー・クアンユー回顧録〈上〉——ザ・シンガポールストーリー』日本経済新聞社
- National Museum of Singapore（2007）“National Museum of Singapore Guide”